

# 「楽しさ」を原動力とした中心市街地の「再生」に関する考察 —新潟市古町地区を事例とした分析—

A study on downtown regeneration powered by enjoyment

-A case study in the Furumachi area of Niigata city, Niigata-

学籍番号 47-206745  
氏名 渡辺 健太郎 (Watanabe, Kentaro)  
指導教員 清水 亮 准教授

## 1. 研究の概要

1990年代後半以降、地方都市中心市街地の衰退が問題視され、1998年から2000年にかけてのまちづくり三法の制定、改正後は中心市街地活性化に関する議論が広まり、2000年代以降は都市再生の流れとともに、多くの政策や事業、取り組みが展開されてきた。しかし、多くの取り組みによって目標とされる中心市街地は人通りが多く賑わいがあり、経済的に活力のある地区であるため、その目標に到達した都市はあまり多くない。時代の変化の中で、中心市街地のあり方をいかに描くことができるだろうか。

また、中心市街地で活動してきた多くの人々の存在を忘れてはならない。都市は人々の存在があってこそ都市たりえると考えるが、様々な人々が中心市街地には集う。人々はそれぞれの人々の思いと具現化された活動をいかに中心市街地の「活性化」や「再生」へ結びつけることができるであろうか。

そこで本研究では中心市街地と結びつく「活性化」や「再生」といった概念を、日本の制度や海外の事例を含めた変遷から整理するのとともに、新潟市古町地区の事例を通してまちの「楽しさ」という視点から中心市街地が「再生」するとはいかなることであ

るのかについて考察し、今後の中心市街地のあり方について検討する。

## 2. 「活性化」と「再生」

海外における都市再生の原点に着目すると、取り組みと取り組みを先導してきた人々の言葉から「人々が都市をつくる」という思想が根底に見える。都市が「再生」する、あるいは都市を「再生」させるというのは、「人々のための都市を人々が、公的な政府の支えあるいは公的な政府の主導とともにつくりあげていく有機的な過程」であり、地方都市の中心市街地における都市の「再生」像として参照すべきなのは、ヨーロッパ都市再生の原点にある有機的な「再生」のあり方なのである。そのような都市の「再生」の先に経済活力の向上をともなった「活性化」が見いだせるのではないだろうか。

## 3. まちと「楽しさ」

成田和信(2010)の「楽しさ」に関する議論を参考にしたとき、「まちの楽しさ」とは「まちにおいて人々が何らかの行為を起こした際に、自らの行為によって生じた心的事象に対して肯定的な感情を抱くこと」と捉えることができ、それは自らまちにおいて行

動するという積極性を含むものであるのと同時に、「個別性」を持つものでもあると考えられる。また、「楽しさ」は行為から見出すものであるのと同時に、行為の動機ともなりうる。

まちの形成過程とはそれぞれの「楽しさ」がつながり、「連鎖」が生まれる過程、または「連鎖」を生み出す過程ともいえるのではないだろうか。「連鎖」の英訳としての“connect”，“connection”は「関係」という意味も含み、「連鎖」とは個々の「楽しさ」に「関係」が生まれること、または「楽しさ」を「関係」づけていくこととイメージできる。「楽しさ」が「関係」をつくりながら、文字通り鎖のようにつながっていく中でまちの集積へと成長していくと考えられる。

## 4. 古町地区と「楽しさ」

### 4-1. 古町地区について

新潟市古町地区は信濃川左岸、新潟島内に位置する旧新潟町および旧新潟市の中心地であり、これまで広域かつ多核的な新潟都市圏において「都心」として位置付けられてきた。本論では新潟市が策定した『古町地区将来ビジョン』(図4-1)の示す範囲を検討する。



図4-1: 古町地区の概要(出典:『古町地区将来ビジョン』)

### 4-2. 近世～近代

古町の「楽しさ」を歴史とともに振り返ると、江戸時代、1650年代後半に新潟町と現在まで続く町割りが誕生するところからはじまる。北前船や西廻り海運の寄港地として、町人たちは力をつけていき、豪商による現存する豪邸の造成、花街・芸妓文化の成立、さらには新潟総踊りをはじめとした現在へ続く祭りの起源の誕生など湊町新潟の文化が開花した。これらは現在の「歴史まちづくり」のベースにもなっている。幕末には開港によって国際港へと発展するのと同時に、明治期における新潟県庁、新潟市役所の立地、昭和初期にかけての映画館、百貨店の林立によって新潟都市圏の中心へと成長していく。

### 4-3. 高度経済成長期

その後転機となるのは高度経済成長期、度重なる災害からの復興や新潟国体の開催とともにまちの風景が一変する。まちの大部分を構成していた木造建築が建て替えられたほか、掘割が埋め立てられて道路化し、さらに現在のアーケードが建設された。こうして湊町新潟としての風景は古町から消えていき、現在の商店街中心の姿へと変貌していった。このような変化の一方で、大和や三越といった百貨店、大型店の開業、西堀ローサと呼ばれる商業地下街の建設など中心商業地、繁華街としての位置づけが変わることはなかった。

### 4-4. 高度経済成長期～現在

名実ともに新潟の中心となった古町地区であったが、1960年代以降のモータリゼーションや郊外化、商業構造の変化などによ

って徐々に人々の足が遠のき、歩行者数の減少や商業規模の縮小が進んできたため、2000年代以降対策が図られてきた。しかし、その古町地区において新たな魅力を放つ人々の活動がある。

#### ・上古町エリア(図4-1、紫のエリア)

古町地区の一番南に位置し、商店街が続く上古町エリアにおいて、若手経営者による出店が続くきっかけとなったのは、若者3人によるチャレンジショップであった。約20年前、若者3人が西堀ローサ(地下街)でチャレンジショップを経営しており、3人のうちの1人は当時新潟大学の学生で古町に居住していた。その1人は当時「活性化」を課題としていた上古町のまちづくり勉強会へ参加することとなり、その後商店街組合の理事に就任、チャレンジショップも上古町の店舗へとつながっていく。同時期には都市計画事業のアーケード整備もあり、上古町は「リニューアル」を果たすが、その後空き店舗への若手経営者の出店が進んでいった。政策の後押しのもとでの、既存商業者と新規出店者の協力によるイメージの刷新ともいえる。

#### ・「歴史まちづくり」

古町地区における「歴史まちづくり」は、担い手と目的・活動が多様であり、まず「歴史まちづくり」の核をなすのがまちなみ保全である。地元の建築家やデザイナー、新潟大をはじめとする大学の学術関係者、さらに文化人や活動的な市民が集い、現在の新潟まち遺産の会となる団体が設立されて活動が推進され、豪商家の建築の保全や花街エリアのまちなみ整備が行われてきた。

花街エリアの歴史まちづくりは、まちなみ保全とともに、芸妓文化の継承という側面も合わせ持ち、芸妓文化を体験するイベントや、座敷外のホール・会館等での公演を通して認知度の向上を目指している。

#### 4-5. 考察

現状をより長いスパンで捉えたとき、「中心市街地」の衰退はまちの「楽しさ」の転換点に位置しているといえるのではないだろうか。高度経済成長期には多くの人々が百貨店や商店街に集い、同質的な「消費」を楽しんだが、現在三越や大和は閉店し、「消費」の中心にあるのは個々の商店である。古町を訪れる目的や古町において向かう先は個別化し、また「消費」中心からまちにおいて創作活動が活発化するなど「楽しさ」の多様化が進んでいる。そして、創作活動は古町のこれまでの歴史を参照し、古町の古参と新参者が混在しながら展開している。

創作活動が活発化しているという点は、まちとして元の姿へ戻りつつあるというべきなのかもしれない。かつての新潟町の近世へ遡れば、力を持った商人たちが豪邸を建設し、芸妓文化が花開き、新潟総踊りをはじめとする祭りの原形となる祭りが催された。現在の「歴史まちづくり」が基盤とする湊町新潟の文化である。その後高度経済成長期における百貨店を中心とした「消費都市」的な位置づけを経て、現在は再び新潟の人々が古町の文化を築く過程にあり、築く過程は人々の活動の有機的なつながりの上でなっている。図4-2は古町地区において活動する人々の相関図であるが、空洞化したまちに新

たな人々が加わり、新たな「楽しさ」が見いだされるのと同時に、つながりが形成されてきた。

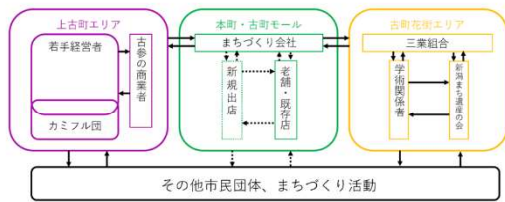


図 4-2: 古町地区で活動する人々の関係

## 5. 古町地区における中心市街地活性化に関する政策・取り組みの分析

上古町エリアが浮揚するきっかけをつくった学生 3 人は、チャレンジショップ制度と空き店舗対策を活用しており、その後上古町商店街へと参画した若手経営者も空き店舗対策の補助事業を活用している。起業して空き店舗へ出店することを希望する人々が存在し、行政の空き店舗対策や起業支援と結びつくことで、活動が活発化することとなったといえる。同時に上古町商店街はアーケード改築においても補助を受けており、商店街の浮揚は人々の活動(=新規参入する若手経営者の存在や古町通 1~4 番町の事業者による「まちづくり推進協議会」の設立など)とソフト面、ハード面での政策が結びつくことで成り立ったものといえる。

ソフト面とハード面の連携という点では、歴史まちづくりと建築物の保全やまちなみ整備の結びつきも指摘できる。

この政策と結びついた人々の活動は、2019 年に策定された「古町地区将来ビジョン」へと反映されることとなった。「古町地区将来ビジョン」は人々の活動が作りあげつつある古町のイメージを強化するもの

であり、今後の人々の活動の支えとなるものでもある。

## 6. まちの「再生」からはじまる「活性化」

新潟市を事例としたまちと人々の活動についての分析をふまえると、まちの「再生」には、①人々の活動が活発化する“activation”の段階、②「活発化」の段階と同時に、または前後して人々がまちと結びつき、時に町へ愛着を持つ“reattachment”の段階、③最後に人々の個々の活動が関係づく“connection”の段階があると考えられる。

このように人々がまちと結びつき、新たな活動を始め、そしてそれぞれの「楽しさ」を見出すことこそまちの「再生(regeneration)」といえるのではないだろうか。人々の活動は公的な政策と結びついて展開され、そして新たにまちへやってくる人々が「楽しさ」を見出す素地をつくっているのである。

### [参考文献等]

- ・成田和信(2010)「快さと楽しさ」慶応大学日吉紀要 人文科学 No. 25
- ・新潟市『古町地区将来ビジョン』
- ・Office of the Deputy Prime Minister, 2001, Our Towns and Cities: The Future - Full Report